（別紙２）　　審査の結果の要旨

氏名　　山﨑　健太（やまざき　けんた）

本論文は、『古事記』『日本書紀』（以下、記・紀）に多数含まれる歌が、特に記において果たす機能を明らかにするものである。全体は、問題提起を行う序章、倭建命をめぐる物語に即して論ずる第一章、大雀命（仁徳天皇）をめぐる物語に即する第二章、結論として『古事記』にとって歌とは何か、を述べる終章の四部から構成される。

序章は、允恭記、軽太子の歌を取り上げる。人が離れて乱れようとも、共寝を果たさずにはおかない、という歌が、共寝の後に歌われる文脈は、従来不整合とされ、歌が元来無関係だった可能性も説かれてきた。しかし歌い手の心情表現としては不整合でも良しとするのが記の態度であって、その歌の様式が、人心が離反して乱が起こる物語を保証するのだという。抒情よりも、叙事を担うものとして歌を捉えるという視点を提起する。

第一章では、天皇でないのに天皇同様に待遇される、記の倭建命の物語を、歌を中心にしたテキストとして読解する。尾張の美夜受比売の歌は、王権の象徴たる天の香具山を詠い、「高光る日の皇子」という天皇に対する呼称で呼ぶことで、倭建命が天皇たる資格を持つ者と表わす（第一節）。倭建命は、神に打ち負かされて弱りながら大和に向かう途中で、「尾張に直に向かへる尾津の崎」の一つ松を歌う。それは、能煩野で歌う「娘子の床の辺」に置き忘れた草薙の剣とともに、美夜受比売を想起するもので、やはり倭建命の天皇の資格に関わる（第二節）。倭建命は死んで白鳥になり、妃や皇子が歌いつつ追う中、大和には下りず、河内へ向かう。それはその子孫が所謂河内王朝を立ててゆく物語を導く（第三節）。

第二章、大雀の妻、磐姫は嫉妬する妻であり、その心は歌で「大猪子の肝向かふ」と表現される。その嫉妬は、他の妻たちを「待つ女」に定位し、それを拒否する女、女鳥王の物語を引き出す（第一節）。大雀が、父応神天皇から日向の髪長比売を賜わる際には、女に思いをかけることを「ぬなは繰り延ふ」と譬喩歌的に歌う表現が見え、歌い手が記紀で違っても、その発想は変わらない（第二節）。しかし紀では、歌われる心が地の文で説明されてしまうのに対して、記では説明が無く、人物の心以上に、天孫の降臨した地、日向の女を娶る者が即位する、という物語を進行させる機能を果たしている（第三節）。続く吉野国主の呪的な歌もまた、日向の隼人と繋がりつつ、大雀を寿ぐものである（第四節）。

記紀の歌は、所伝と歌詞との距離が大きく、説明が難しい。かつての両者を切り離す立場から、近年は整合的に結びつけて読む態度へと変化してきたが、記紀にとって歌とは何かという問は等閑にされていた。扱った歌がごく一部に限られ、叙述が煩瑣で、論旨に明快さを欠くなど、今後の課題も多々あるが、審査委員会は、記の物語展開に働きかける歌の機能という新たな見方に意義を認め、博士（文学）の学位に価するとの結論に至った。